

令和5年度第2回高知県社会福祉審議会地域福祉専門分科会 議事録

- 1 開催日：令和5年10月24日（火）18：00～20：00
- 2 場 所：高知城歴史博物館1階 ホール
- 3 出席者：委員12名中11名出席（出席者別添参照）
- 4 内 容：
 - (1) 開会挨拶（高知県子ども・福祉政策部長）
 - (2) 議事：第4期高知県地域福祉支援計画の素案について
⇒地域福祉政策課 課長より内容説明を行った。

【主な意見・質疑応答】 ○：委員、●：事務局

- 調整中となっはいるが、第1期からの振り返りを現状と課題を踏まえて素案10ページの第1章Ⅱ－1「高知県の現状と課題」に記載してほしい。
- 具体的な取り組みのうち、高齢者福祉の高知版地域包括ケアシステムの深化・推進が高知型地域共生社会の中核的な基盤として位置づけられているところがポイントだと感じた。その中でも介護は民間の事業者が大部分の役割を担っているが、現状たて糸（行政主体の取り組み）として整理されている。行政主体の仕組みづくりの定義づけか注釈を付けるなどをしておいた方が良いのではないかと。
- あったかふれあいセンターを高知型地域共生社会の拠点としているが、前回、別の委員からも社会福祉法人との連携ということについて話があったが、事務局からも説明のあったとおり連携をしっかりとしていかなければ、あったかふれあいセンターのが期待どおりの機能を十分に担うことはなかなか難しいのではないかと感じた。
- よこ糸の地域づくりに関するところがこの計画で一番重要ではないかと感じている。地域づくりの担い手として、民間の方、ボランティア、民生委員の皆さんや市町村社協、あったかふれあいセンターも入るのかもしれないが、よこ糸を誰が担うのか、地域福祉を担っていく人材をいかに確保していくかということが今後の課題と感じている。また、保育も福祉の重要な部分なので、計画の人材確保に関する部分でもう少し触れてほしい。
- 前回ご指摘いただいた、あったかふれあいセンターへの参画については素案にはまだ触れている程度ではあるが、今回の計画改定でも意識しているところ。地域にお住まいの方で地域で住み続けたいという希望を持たれている場合にどこまで行政として「よこ糸」に絡めながら支援を行うかというのが重要な観点と考えている。
- 人材確保については各分野で事業所があるため、どれだけ盛り込むかは検討が必要だが、視点として重要なため、引き続き議論し計画策定を進めたい。
- これまでの振り返りについては、PDCAのうちまだPDしかできていないような形になっているため、振り返りをしたうえでバージョンアップを図るといような内容にしてい

たい。

- 行政主体のたて糸については、各分野の行政というよりは制度サービスの意味合い。制度サービスと言った時には行政も民間も社会福祉法人も入ってこようかと思われるので、誤解のないよう記載する。
 - 第4期地域福祉支援計画で最も大事だと考えているのはよこ糸の取り組み。多様な主体に参画していただくことが必要であることから、本分科会等で広くご意見を伺っている。また、県社会福祉協議会でも現在地域福祉活動支援計画の見直しをされていると思うが、地域福祉の推進に当たっては県社会福祉協議会にもリードしていただく必要があるため、連携を図りながら柱2の内容を厚めに記載していきたい。
- 第1章I-4「計画の性格と位置づけ」に社会福祉協議会とあるが、ここは高知県社会福祉協議会ではないか。下の図のとおり市町村社会福祉協議会は地域福祉活動計画だけでよいのではないかと思う。
- 地域活動支援計画は高知県社会福祉協議会が策定するため、文章内の「社会福祉協議会」を高知県社会福祉協議会と修正する。
- 第2章1-(10)「自殺予防対策の推進」で自殺に関する表が出てくるが、男性は若い層から中高年まで、女性の方はどちらかというところ40から60代が多い。このような高知県の実情をもう少し反映した方がいいのではないか。
- 第2章1-(15)以降の防災・減災対策について、支援体制のことしか書かれていない。今、DWA Tなどで受援計画等を随分とやっているが、大きな災害に備えて、各地域で何をしてもらいたいのか等、そういったところを入れてもらいたい。
- 同じ箇所の現状と課題に死者数に占める高齢者の割合などの図があるが、これが何のデータなのか分からない。東日本大震災時のデータなど、説明を足してほしい。
- 第2章2-(2) 高齢者が地域でいきいきと暮らし続けられる仕組みづくりのポイントの一番下に「通いの場」というのが出てくる。対して、具体的な施策では「集いの場」が出てくるが、それぞれ何を指しているか。あつたかふれあいセンターは集いの場だと思うが、それとは違うのか。
- 「通いの場」は基本的に住民主体で、公民館等、色々なところに集まって行う活動。
 - 言葉の整理をするが、基本的には同じ。
- 説明でも触れられていたが、第2章3-(1)「あつたかふれあいセンターの整備と機能強化」で、社会福祉法人の積極的な参加を促す視点も重要と入れていただいている。これは、これまで参加していないから参加を促すということなのか、何を求められているのか。あつ

たかふれあいセンターのイメージ図の支える関係機関の中に社会福祉法人を入れてもらうなど、県が期待する役割を明確にしてほしい。

- 災害時の受援については大事な部分になるので触れるようにしたい。
 - あったかふれあいセンターの専門職の方との融合については、持続可能な体制づくりをこの機会に県としても検討していきたい。
- 高知県全体だとこの素案のような形になると思うが、高知市を中心とした地域と、東部西部との地域差があまりにもつきすぎている。計画どおりに進められるのは高知市から1時間圏内だろう。地域の施設を使ってほしいが、子どもが中心部に住んでいると、東部や西部など遠い地域に頻繁に通うことが難しいため自分たちの生活圏に親を呼び寄せてしまう。そうすると郡部の施設が成り立たなくなってしまう。一般の特養など自由にどこでも使えるというふうな形の制度をそろそろ考え直さないと、郡部の施設は成り立たない。家族は大変なので近くの施設にいてもらった方がよいというのも正解だが、その辺りをどうしていくかというのを検討していかないといけない。中央部と郡部、それぞれに対する支援や考え方を分けて書くなどの検討をお願いしたい。
- お話のとおり、県内中心部と中山間の今後の姿とそれに対する取り組みを分けて整理していきたい。県としても中山間再興ビジョンで特に中山間地域の人口問題や暮らしをどう支えるかというような議論を今年度しており、来年度から取り組みをスタートさせようとしている。福祉、介護、医療も生活を支える重要なポイントであるため、この議論も併せて考えていきたい。特に中山間でサービスをいかに守っていくかという視点は検討の中に盛り込んでいきたい。
- 現場で活動をしていて感じるのは、地域づくりを誰が担うのかということ。色々な活動をやるにしても人材がおらず同じ人たちが持ち回りでやっている。また、活動は全部ボランティアで行っており、持ち出しも大きい。地域活動に参加していない、地域で生活している7割8割の方に対する何らかの取り組みが必要なのではないか。
- 市町村社会福祉協議会の経営は非常に厳しい状態。すき間時間を狙って社会福祉協議会の本業に取り組んでいる。何とかできないだろうか。
- 社会福祉協議会の自主財源がなかなかないというのは全国的な課題。支え合いの地域づくりを担う社会福祉協議会をどういった形で運用していくかというのは大きな課題だと考えるので、県としても一緒になって考えていきたい。
 - コミュニティや地域づくりの担い手をどうつくっていくのかという点について、基本的には元気な高齢者の方、特に元気な方にいかにその地域の中で活動いただくか。本年度実施し

た県民世論調査の速報値でも、コロナ禍を経て、地域活動に参加できない・したくないといった高齢者の方が増加している。活動したいけれどもできないという方も当然おいでと思うが、そういった方々に日頃の地域活動に参加いただけるような仕組みづくり、仕掛けをしていくことが高知型地域共生社会につながる。よこ糸の取り組みと県社会福祉協議会の地域福祉活動支援計画との融合で地域をどのようにつくっていくか、持続可能な体制づくりということも一緒に考えていきたい。

- 若い世代の意見として、色々な県の会議でも若い世代の参画がひとつのテーマだと感じている。若者団体も地域の現場で動いていきたいという気持ちがあるので、柱3の人材確保や人材育成というところに、福祉を教育の中に入れることはできないか。地域に関わるきっかけがないと、どの分野にも興味を持ってないのが今の若者。学校の授業の中で地域に関わることができると、高校を卒業した後の地域活動や青年団、PTA、町内会、自治会などでの活動に無理がなくなる。地域の活動に触れていく機会が増えると思う。任意の活動は限界に来ているのではないかと感じているので、行政と一体的に教育の一環に関われたら、様々な分野の問題が根本的に解決するのではないか。
- 例えば、津野町では4、5年前から町を挙げて青年活動を推進している。教育の分野の会議に若い世代が委員として参加し、成人式を二十歳世代のみんなで行うところまで3年かかってもっていくことができたそう。若い人たちが現場で頑張るのを行政が支援するということの重要性を計画の中に入れられたらいい。
- 青年団に協力いただいて、若い方に色々な地域活動に関わってもらおうということで動き始めたところ。まだまだ小さい動きではあるが、若い方が高齢者の中に入ってこないと全く動かない。若い人の力は重要なので、人材育成の部分で若い方のことに触れるべきというのは確かに思う。
- 郡部の県立高校の存続が非常に難しい状況。教育委員会の方で課題になっているが、地元の学校へ進んでもらうためにも小学校中学校の頃から地域の大切さ、地域を大事にすることをしっかり伝えて、住んでいる地域の良さを感じてもらおうことで人材として残ってもらおう。人口減少対策にもなるかもしれない。素案ではこういった部分が薄いので、読み取りにくかったかもしれない。
- 福祉教育を関係団体も含めて進めていく必要がある。本文にはまだ書き切れていないが、県社会福祉協議会とも一緒にやっていきたい。
- 市町村社会福祉協議会は非常に人材難。募集してもなかなか集まらない。また、あったかふれあい事業について、うちの村では利用者の減少や調理員の確保困難により2集落で事業をやめたので、拠点方式ということで社協本体で一部受け入れて補完しようとしている。これまでも出た負担の問題について、県の方でも十分に考えていただきながら、資金面等で

の支援をお願いしたい。

- 市町村長訪問でも同様の話をいただいている。学生の方に社会福祉分野を志していただき、定着してもらうということの支援をしていきたい。人材確保も含めて県社会福祉協議会と共に、市町村社会福祉協議会の支援を二人三脚で行っていきたい。
- 地域福祉のフィールドとして、あそこ（社会福祉協議会）へ行ってみたいという魅力ができることが大事ではないか。県立大の社会福祉学部の先生方にもご協力いただきたい。
- 地域の福祉や医療現場に素晴らしい人材が多くいらっしゃるの、若い人がそのような方々に出会い地域に関心を持ってもらうような、義務教育の段階からの高知型の福祉教育、地域共生教育の仕組みづくりを何らかの形で行うことができればいいのではないか。高校の教師からはコロナ禍で福祉への関心が少なくなっているという話を聞いており、危機感を持っている。今ならまだ再開できるイベント等もあると思うので、早めに、義務教育の中で市町村社会福祉協議会や教育委員会にも協力いただきながら、高知型の福祉教育ができればよいと感じている。
- 県立大社会福祉学部の卒業生でかなりの数が県内の市町村社会福祉協議会に就職しているが、定着率としては半分程度と思われる。女性の場合、結婚、出産等の理由もあるが、労働条件ややりがいというところで難しかった部分もあると聞いている。そのことを含めて様々な資格を持っている人々がその力を発揮できずに地域の中で埋もれているということもあると思う。市町村社会福祉協議会の取り組みに大学も協力してそのような人材を活かすなど、社協の魅力づくりという点で何か一緒にできることを検討していきたい。
- 全体のことで、資料3の計画の概要のうち、3枚目の第4期計画の基本事項のポイント①でLGBTQについて理念で触れているが、LGBTQは例えば障害者というようなある特定の属性を持っている人の集団なので、もし盛り込むのであれば人権のところ、差別をされない、偏見を持たれない地域づくりを目指していくという文脈で触れてほしい。
- 建て付けとして、資料3の4枚目で各分野ごとに具体的な取り組みを記載しているが、「その他」というのはLGBTQも含めたその他の属性の人であったり、あるいは多世代に対する支援が該当するのか。対象としてなのか、高齢・障害・子どもといった事業以外のものがその他なのか、どういった意図で作られているのか教えてほしい。
- こどもまんなか社会ということであれば、内容に子どもの貧困解消や貧困率の数値の改善など、特にひとり親家庭の問題についても取り上げていただき、子どもを中心とした世帯全体に対して支援を包括的に提供していくということが盛り込まれると良いと感じた。
- 高齢・障害・子どもは基本的にそれぞれの計画があり、それを上位計画として束ねるという意味で3つは分野ごとに記載している。それ以外の、本来地域福祉支援計画に書かれるべき部分がその他となっており、表現として十分ではないと思うので整理したい。

- 子どもの貧困問題については、国の審議会でも誰一人取り残さないというような議論がなされているので、そういった部分も反映したい。
- 若い世代からの福祉教育という話が出ていたが、高知県内でも子ども民生委員という取り組みが徐々に広がってきている。高知市では、高知市社会福祉協議会がいろんな小学校とか保育園へ出前講座をしており、「高齢者にはこんな不便がありますよ」というようなことを教えて、お年寄りを見たら優しくしましょうねとか気をつけましょうねというような、いろんな社会福祉のことを教えている。これが全体に広がっていけばいいと感じている。
- 教育に関する意見についてはその通りだと思っている。若者が福祉の現場に携われるような環境づくりが必要。先日イオンで福祉フェアがあったが、若い人がノーリフティングケアなどいろんなものに興味を持っていた。県立大の学生や高校生も来ていた。若者がたくさん集まるようなイベントをつくっていく必要があると思う。
- 前回7月の分科会以降、ヘルパーステーションの閉鎖が続いており、ヘルパー人材の確保が困難になっている。ヘルパーステーションがなくても在宅での生活をサポートできるような、地域を含めた体制づくりをしていかないと、今後ヘルパーが増えることは難しいと感じている。また、地域にもヘルパーがいなかったら大変な状況になるということを理解してもらわないといけない。あったかふれあいセンターの中にも積極的に関わらせていただき、ヘルパーステーションがなくても支えていけるような地域づくりに参加できればと思う。
- 保育園でも人材確保が困難な状況が続いている。大変な仕事ではあるが、やりがいや魅力はとてもある仕事だと思うので、若い方に興味をもってもらう取り組みは重要。
- 保育士は仕事が大変な割にお給料が良くないという声も聞かれる。処遇的改善をお願いしたい。
- ネットワークづくりについて、保育園も地域の拠点として、地域の方に来ていただいて子どもとふれ合ってもらったり、園庭開放などで地域の未就学児のお母さん方に来てもらって、楽しい場所だということを発信していきたいと計画している。
- 保育士に小さいころから興味をもってもらおうということを考えた時に、保育園では地域のいろんな職場を訪問させていただいている。実際の現場を見てかっこいいなと憧れることが大事だと思う。実習等も一つの窓口であると思う。
- 中山間部で福祉の仕事に携わってきたが、1人の利用者のためだけに山に行ったり、近くの人を2、3人一緒に連れてきたりなど、中心部よりも余計に人員が必要。また、ヘルパー事業がない場所でデイサービスは利用しているというような場合、在宅での介護に負担がかかるので、中山間部での福祉の仕事は厳しい。